

---

# 父と娘(幻羅、綾音、菖蒲)

隠し葉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

父と娘（幻羅、綾音、菖蒲）

### 【Nコード】

N1801B

### 【作者名】

隠レ葉

### 【あらすじ】

DOA3のOPに納得出来ない部分が多々ありましたので、自己満足な展開にしてみました。

自分の出生の秘密を知った時、綾音はひどくショックを受けた。  
認めたくなかった。

今の今まで、男手一つで育ててくれた「父」が、  
「本当の父」ではないと思った事など、一度もなかったからだ。  
知ってしばらくは複雑な思いから距離を置いてしまった事もあった  
が、

何も知らない「父」は今までと変わらず厳しく、温かく、  
自分を守り、包んでくれた。

それで綾音は「父」と距離を作る事をやめた。  
知るまで、何も疑わず彼を「父」と呼び、慕っていた。

この意味が分からないほど、綾音は愚かではなかったのだ。  
それに、と次期頭首である疾風の顔を思い浮かべた。

何年も前から密かに思いを寄せている人。

この「事実」を受け入れたら、彼は血の繋がった兄と言う事になる。  
と言う事は、この「思い」は許されない事だ。

当然、断ち切らなければならぬ。

これはひどく辛い事だった。

そこで、綾音は全てを心の奥底に封印する事にした。

父は私が知ってる事を知らない、自分が言わなければ何も変わらない。  
い。

そう、自分は何も知らないのだ。だから、このままでいい。

綾音がこう思うようになってから、しばらくは何事もなかった。  
しかし事件は起こってしまった。

思いを寄せていた疾風が何者かに襲われ、重症を負った。

重症を負った彼を里へ運んだ綾音は、後に襲撃者の名を知った。

その名は雷道<sup>ライドウ</sup>――

「父様、これより任務を果たして参ります」

「そうか…」

綾音の「父」幻羅は重々しく答えた。綾音に与えられた任務を知っている。

その任務とは、次期頭首の妹である霞を抹殺する事。

霞は次期頭首の座を捨て、

兄を半死半生に追いやった憎き敵雷道を倒すべく里を発ち、抜け忍となった。

そして、忍の世界に「抜け忍」と言う存在は許されない。

「任務に出る前に、どうしてもお聞きしたい事があるのです」

幻羅は、綾音がひどく思いつめた顔をしていると思った。

「構わん、何だ？」

綾音は覚悟を決めた。もう、後戻りは出来ない。

「…父様！私…私は、あなたの娘ではないのですか！」

「！」

幻羅は押し黙った。

それで綾音は、真実なのだと悟る。

「…そんな…」

綾音はぽつりと呟いた。

当に知っていたとは言え、認めたくない事を認めさせられるのは辛い。

何かの間違いであってくれればいいのに。

幻羅の脳裏に、

生まれたばかりの綾音を引き取った時のことが鮮やかに思い出された。

自分の腕の中ですよすやと眠る、紫の髪をした女の赤子。

「幻羅、幻羅…この子をどうかお願いします」

その側で、目に涙をためて自分に懇願する一人の女性。

彼女の名は菖蒲。この里の頭首、紫電の奥方。

幻羅は赤子の秘密を聞かされていた。

この赤子は頭首紫電の兄で、

次期頭首の座を約束されながら破門された雷道と、目の前にいる奥方、菖蒲との不義の子であると。

「もちろんです、この幻羅、命をかけて守り、お育て致します。

…奥方、私は幸せです」

それを聞き、菖蒲は耐え切れない、と言うように涙を流し始めた。

「幻羅、許して下さい。貴方の気持ちを…」

幻羅は菖蒲から顔を背けた。

「それ以上は言って下さいますな」

「貴方の誠意に感謝します…」

菖蒲は彼に頭を下げた。そして再び顔を上げ、赤子に向かい

「綾音、愚かな母を許して下さい…」

消え入りそうな声で呟き、菖蒲は顔を伏せた。

「…全て、聞いたか」

綾音は無言で頷いた。

「そうか…」

幻羅はふうつと溜息をつき、どこか遠くを見つめる。

「奥方は悩み、大層心を痛め、苦しんでおられた。心情を察して差し上げてくれ」

綾音はそんな幻羅を見つめ、ある事に思い至った。

「もしや父様は、奥方を…？」

「やはり、女は鋭い」

幻羅は寂しそうに笑った。

「お前が私を父と呼んでくれる度に、私は嬉しくて仕方が無かったのだよ。」

時折、お前と血が繋がっていない事を忘れた時もあったのだ…」

「…！ごめんなさい、ごめんなさい父様。責めるつもりで聞いたので

はありません」

綾音は幻羅の胸に縋った。

どんなに想っても、決して結ばれる事のない人がいる。  
私と同じ思いを抱えている…

「綾音は幸せです、父様には感謝しています」

実の親でさえ我が子を育てる事が出来ない人もいると言つのに、  
父様はこんなにも、こんなにも慈しんで下さって…

「父様、これから綾音を娘と思って下さいますか？」

幻羅は目を見開いた。

「綾音、お前…全てを知っても私を父と呼んでくれるのか…」

幻羅は手で顔を覆う。

「本当の事を言つと、他に父がいると言つ事より、

父様の実の娘ではないと言つ事の方が、綾音は悲しかった」  
それは綾音の本心だった。

「綾音…」

「私の父様は、幻羅父様だけです、他に父など知りません」  
雷道と言つ男などどうでもいい。まして母や、その子ども達の事など。

疾風と霞の顔が綾音の脳裏に浮かび、消えた。

綾音のこの言葉に嘘は無かった。

「綾音…全てを断ち切るのは難しいだろうが、誰の事も憎んではならぬ」

半分だけの血の繋がりとは言え、実の姉を追う任務を与えるとは、  
紫電様も酷な事をなさる…

「はい…」

綾音は小さく返事をした。

「私の娘、与えられた任務を果たしておいで。例え、どんな事があろうとな」

「はい！では父様、行つて参ります！」

綾音は元気よく返事をし、そして心の中でごめんなさい、父様。と  
呟いた。

父様は、私がこの任務を辛がっていると思っているのでしょうか？  
でも私は、あの女… かすみだけは許せないのです。  
むしろ、堂々とこの手であの女を葬れるのが嬉しい。

そして、綾音の姿は消えた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1801b/>

---

父と娘(幻羅、綾音、菖蒲)

2010年10月21日13時15分発行